2006.04.24-小学校から英語を必修？　地球市民の発進力育成を(朝日新聞)

きょうの論点

文部科学相の諮問機関・中央教育審議会の外国語専門部会が、小学5年から週1時間程度の英語を必修化する必要があるとの提言をまとめた。国際化時代の英語教育はいかにあるべきか。

国際教養大学長
中嶋 嶺雄（なかじま みねお）さん

36年生まれ。中教審外国語専門部会主査。専門は国際社会学。前東京外国語大学長。

地球市民の発信力育成を

開国か鎖国か。それに近い激論が起こる要素が、この問題にはある。小学校の英語教育に賛成の私は、開国論をとりたい。

世界はグローバル化している。それを〝自明の理〟として、文部科学省は国際共通語としての英語が使える日本人の育成を行動計画の柱にしている。しかし、グローバル化しているから小学校でも英語教育、とは、実に単純化した構図ではないか。

50年代初めに冷戦体制が敷かれ、ここ15年の世界の変化はすさまじい。今後もさらに変わるだろう。そんななか、「地球市民」としての発信力をつけなければならぬ多くの子供たちを、鎖国時代的な状況に閉じこめておいていいのか。

すでに私立や構造改革特区内の小学校では、英語を真剣に教えている。IT化で世界が同時進行し、国境がますます低くなるなか、他校は置いてけぼりでいいのか。地球規模の意思伝達手段としての英語を「一般人に必要なし」とするのは、まさに国民を愚民にした政策だ。教育の機会均等の見地からも、バラつきの広がりを文部科学省も気にかけていた。

国語力さえ落ちているのになぜ英語か、という意見がある。では、国語の時間を増やせば国語力がつくのか。国語力の衰退は、言葉に対する日本社会全体の認識や、感性の低下による点が大きい。原因の一つにテレビの倫理悪番組の影響もあると思う。

英語学習で培った表現力が国語学習などに生かされている千葉県・成田小のケースもある。例えば「ジェスチャー（gesture）」という英語。これは知っていても、「身ぶり手ぶり」という立派な日本語を今の子供たちはほとんど使わない。それが「ジェスチャー」を元に「身ぶり手ぶり」を教えることで日本語をよみがえらすこともできる。あるいは英語教育を通じて異文化を紹介することで逆に日本文化のすばらしさを教えられる。

異文化教育をいうなら中国語や韓国語でもいいはずという反論もあろう。私自身、フランス文化にひかれて高校ではフランス語を学び、大学入試はフランス語で受けた。その後、中国研究に打ち込んだので、いまも一番滑らかに出てくるのは中国語だ。

だが「国際共通語」となれば、文句なく英語だ。グローバル化＝米国化という側面はあるにしても、英語優位はいかんともし難い。

問題は中学から大学まで10年間習っても大半が身につかない、従来の英語教育にある。時間と労力の膨大な無駄を繰り返している。この立て直しこそ国家百年の計と思う。それには早期教育の一環としての学習が必要で中学からでは遅い。

文科省が教育方針を変える度に現場が混乱する、という指摘がある。しかし、英語の必修化は、日本が国際文化国家として生きていくために不可欠な、国家のあり方にかかわる問題だ。過去の「揺れ」とは同列に扱えない大きな歴史的選択なのだ。そのための条件整備には万全を期したい。

（聞き手・成田太郎）

立教大教授（英語教育、通訳翻訳論）
鳥飼 玖美子（とりかい くみこ）さん

同時通訳者として活躍後、立大院異文化コミュニケーション研究科へ。『歴史をかえた誤訳』など。

日本語で考える教育こそ

今度の中教審部会の提言は、小学校高学年で「教科」として英語を必修化したいという意図が見え隠れしている。提言を読むと、小学校の英語教育の目標は、ALT（外国語指導助手）を中心とした外国人との交流を通して、音声や会話などのスキル（技能）より、国際コミュニケーションをより重視することを基本にする、としている。

「コミュニケーション」と簡単に言うけれど、実は大変なことです。それは人間同士が思考と論理を言葉にのせてぶつかり合うことで、相手の言い分を聞いた上で、自分の主張を相手に分かってもらう。反論に応え、持論を展開し、理解し合う相互作用です。

「グローバル・スタンダード（地球標準）」という言葉が水戸黄門の〝印籠〟のようにまかり通っているが、英語が上手にしゃべれたら尊敬されるなんて、まったく筋違い。今日の日本は、大人ですら隣人や見知らぬ人との会話に満足にできない状況にある。母語で考える力、生きる力をつけること。それこそ、小学校という人間の根っこをつくる時期に、英語を教えることより大事だと思う。

中教審部会の提言を読んでも、これから具体的にどうするのかが見えてこない。一番大きな問題は、英語を教える教員をどうするのか。ALTを増やすことなどを提言しているが、英語が母語というだけで教育なんかできない。さらに、英語を必修にすることで有形無形の圧力が子どもにかかること、英語優先主義の誤った刷り込みの可能性を排除できないことを私は危惧する。それよりは、国語教師と協働で「ことば（コミュニケーション）」の教育ができないか。

グローバル化というけれど、今日、人々が国境を越えて自由に動き回ることによって、世界は多文化主義になっている。グローバル・スタンダードから自分たちの文化や言語を守ろう、としている人々もたくさんいる。多様であるからこそ世界なのであり、どこに行っても同じようになったら、海外旅行なんて面白くも何ともない。

「国際人」とは何か。それは「向こう三軒両隣」と言うように、隣さんとのおつきあいから始まる。例えば小学校のある地域に住むブラジル人や中東からの人たちと接して、言葉や文化の違い、世界の多様さを体験する。そうしたことこそ大事なことで、英語は中学からでも十分できる。

（聞き手・部丸修一）